コメント

# 「何のための研究か」という視点

山本登志哉
（共愛学園前橋国際大学）

改めて当日の議論のテープ起こしを読んでみて、まず最初にぐっときたこと、それは松本さんがニール・ヤングの映画を見て、そのシーンに突然泣き出してしまう、という場面だった。なにがどう「ぐっときた」のか、今の私には言語化できないのだけれど、それはたとえば同じく松本さんがおばあさんと一緒に散歩していて、いつもある場所に来ると地べたに座って一緒に缶コーヒーを飲む、というエピソードがなんだか分からないが「ぐっとくる」というところともどこか繋がる。大倉さんの「質感」ということばとそれがうまく繋がるかどうかもよくわからないし、また仮にそれがその「質感」だとしても、私が「ぐっときた」ということの質感が、果たしてそこで松本さんが感じていたことの「質感」とどれほどにかさなるのかもぜんぜん分からない。唯一可能なことは、おそらく、松本さんとこう語り合うことくらいだろう。

私「映画で泣く話があったでしょう、あれ、僕、ぐっと来たんですよ」松本「え？ あ、そうですか？ね、そうでしょう？くるでしょう？」私「うん。きますよね」。

ろれつの回らなくなった酔っぱらいが飲みながらくだをまいて「おまえ、分かるか？」「分かる分かる」「そうか、分かるか。分かるよな！」と訳も分からず言い合っている構図とほとんど差がない。じゃあ何が分かったのか、言語化して語ろうとしてみれば、とたんにしょぼくれてしまって、分からなくなってしまうかもしれないそのやりとり。

だがそういうやりとりに私はなにかとても惹かれるものがある。一歩間違えば単に酔っぱらいの戯言として捨て去られてしまいそうな、そういう瞬間にこだわりながら、それを死ぬまでに言葉にしたいという松本さんの心意気にとても惹かれるものがある。そういう心意気なしに、どこかで作られた方法論をきれいに使い、小賢しく人間を語る、そういう

研究になんの意味があるんだ、とちょっと息巻いてみたくもなる、そういう魅力を松本さんの生き様に感じる。

大倉さんは自らがつかんだ「質感」を今なんとか言葉にしようとする。方法論的な問いを大事にする大倉さんはそこに記述する自己の位置を問うことを誠実に行おうとしている。以下はその大倉さんとの対話である（括弧内は引用時に補足）。

〇山本：　その質感というのは、解釈に先立って存在するものみたいな感じ？

〇大倉：　そう言っちゃうとまた語弊が。だってそれが僕の解釈みたいな・・・。やっぱり僕との関係とは切り離せないものですけれども、ただ僕と事象との緊張関係の中で出てきたある質感というのは読者にそのまま伝わって欲しいという。「言葉以前のもの」という言い方が非常に危険だというのは分かるんですが。直感的に言って「言葉以前のもの」に類する何かというのは伝えたい。

〇山本：　それはやっぱり個性的な自分との緊張関係の中で現れてきたということは、一つ（前提として）置くわけですね。

〇大倉：　そうですね、それは重要。「自分が」感じたこと。

〇山本：　だけど自分が感じたことというふうに語ることを通して、他者にもそれが伝わっていくだろうというものがあるわけですね。

〇大倉：　そうです。そうです。

大倉さんが須賀さん（インフォーマント）との語り合いの中で感じた「質感」を可能な限り他者に表現し、共有しようとするとき、そこにはある避けがたい困難がある。その「質感」というものが大倉さんと須賀さんという人物の、ある時点での個別の対峙関係の中で歴史的な一回性を持ってのみ生じたものを、大倉さんという個性の中で繰り返し反芻しつつ、他者一般に伝えられなければならないということである。この矛盾を乗り越えるために、大倉さんはその「質感」を生み出した自分自身のあり方をできる限り語ろうとする。どのような自分がどのようにそこに対峙したが故にそういう「質感」が現れたのか。「質感」の現れた「場所」のありようを可能な限り他者（読み手）と共有しようとするのである。

記述する自己を方法論的な意識を持って見つめ、記述することについて、松本さんは一

見熱心でないようにも見える。「質感」の内容のみでなく、その現れ方も記述しようとする大倉さんに比べると、ある意味では松本さんのそれは非常に素朴な行き方だとも見える。ただし、それは単純に素朴なのではなく、こだわって素朴なのだろうと感じる。たとえば大倉さんが方法論的に自己を対象化する、という作業を行ったとして、大倉さんに現れた「質感」を他者に正確に伝える、ということがそれで本当に保障されるか、と問い直してみる。すると大倉さん自身別の言葉で自覚的に語られているように思えるが、少なくともその「質感」をある唯一の実体として措定する限り、実際は原理的にそのようなことは完全には成し遂げ得ないという結論に、論理的にはたどり着かざるを得ない（たとえば上に書いた大倉さんの内部での＜反芻＞それ自体が、すでに原事態を変容させずには置かないこと、これは記憶研究においても重要な論点の一つとなっている）。もし松本さんがそこにこだわっているのだとすれば、彼の「素朴」さは、その現実をふまえた戦略なのだとも思えてくる（経験と体験についての松本さんの議論をそこにつなげて理解することも可能だろう）。

この問題について、私自身のこだわり方はまずは大倉さんのスタンスに近い。記述される対象（としての主体）を、記述する主体（私）との関係で記述する。対象の記述それ自体が実は反照的に記述する主体を記述している、ということに自覚的であることを重視する。なぜか？

それは記述を、そして研究をコミュニケーション行為として位置づけたいからである。この場合、コミュニケーションとは、「自己の内部のある情報を、媒体を用いて他者に可能な限り正確に転写しあう相互作用」という、意味ではない。そこで問題になるのは「正確な転写」ではなく、「意味あるコミュニケーションの持続ないし発展」である。「転写の正確性」はそのコミュニケーションの構造に依存して相対的である。それは「不正確」だいう意味ではなく、あるコミュニケーションを成立させるに十分な正確性が求められるのであって、そのようなコミュニケーションの文脈から独立に、実体的に情報の「正確性」という基準が存在するのではない、という意味である。その実体化の有無という点で、自己に確たる「質感」を正確に伝えたいと感じているように思える大倉さんと私の間に、違いがあるかもしれない。

言い換えると、あるコミュニケーションの文脈では「おい、おまえ分かるだろう」という酔っぱらいのやりとりはそれ自体で「正確」にお互いに何かを共有させている。だがし

らふに戻って問題を語ったとき、そこには異なる「正確さ」が求められ、同じ問題が再度語り直されることになる。そのような語り直しは、人間が変化しながら、多様な文脈を生きている限り、永遠に続く過程である。私はそのことを大前提として、研究という行為を評価したいのである。

いったい、誰と何を共有し、何を生み出すための研究なのか。そういう問いとしてこの問題を提起することも可能だろう。この点で、松嶋さんの研究は直接に私の問題意識に繋がるところが大きかった。松嶋さんと大倉さんの間には、「個」を記述するということへのこだわり方の違いに関する議論があったが、この問題では私はおそらく松嶋さんと視点を共有する部分が多そうである。「個」か「制度（社会）」か、という問題は常に相対的な問題である。それは記述する際の記述者の立ち位置の違いから必然的に生み出されるものであり、そのどちらかを実体化することには意味はない。これもまた何のために誰と何を共有しようとする議論であるか、という研究の文脈と独立に語ることができない問題だと私は思っている。

以上、当日の発言で言いたかったことの概要を、それを言う私の視点の説明と共に改めて書いてみた。各論者の論点をうまくつかめていない部分は、それが今後の意味あるコミュニケーションに繋がるものとなることを願っている。